



Title	第三部 張家山漢簡『蓋廬』研究概況
Author(s)	福田, 一也
Citation	中国研究集刊. 2008, 47, p. 99-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第三部 張家山漢簡『蓋廬』研究概況

福田一也

一、はじめに

本稿では、張家山漢簡『蓋廬』に関する先行研究を整理し、その研究動向を概観する。

一九八三年、張家山二四七号漢墓から『二年律令』『奏讞書』『脈書』『引書』『算数書』と共に、『蓋廬』と題する古文獻が発見された。その後、二〇〇一年に写真図版と釈文とを載せた『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』（文物出版社）が刊行され、その全貌が明らかとなった。

『蓋廬』は、呉王闔閭と伍子胥の問答形式によって、主に伍子胥の兵法を説く、一種の兵法書である。中でも注目を集めたのは、本書に典型的な兵陰陽家の用兵法が見える点である。

兵陰陽家については、『漢書』芸文志に「（兵）陰陽は、時に順いて発し、刑徳を推し、斗撃に随い、五勝に因り、鬼神に借りて助けと為す者なり」とあり、非常に呪術性の強い兵法として知られている。だが、芸文志所収の兵

陰陽家の著作は早くに亡佚し、『六韜』『左伝』『史記』等の一部にその断片的な記載が見えるのみであった。近年、馬王堆漢墓から兵陰陽家と関連深い『五占星』『天文氣象雜占』等の新出土資料が発見され、その用兵法の一端が明らかとなったが、依然として不明な点も多く残されていた。こうした中、今回出土した『蓋廬』には、『漢書』芸文志の兵陰陽家の説明にほぼ合致する内容が含まれており、その用兵法についても比較的詳細に記されている。これにより、兵陰陽家の思想については、さらに一歩踏み込んだ検討が可能となった。と同時に、本書は古代軍事思想史を考究する上でも、非常に貴重な資料を提供している。

さて、釈文の公開後、中国では毎年三篇前後、『蓋廬』関連の論文が発表されている。しかしながら、全体の三分の一は文字や語釈に関するものであり、それらを含めても、論文の総数は、他の張家山漢簡の文献と比べて格段に少ない。日本に至っては、二〇〇八年に漸く本邦初

となる石井真美子氏の論考が発表されたばかりである。他の文献と単純に比較はできないが、その論文の少なさは、やはり『蓋廬』に対する注目度の低さを示していると言える。

先述の如く、『蓋廬』は古代軍事思想史を研究する上で非常に高い資料的価値を有している。にも関わらず、思いのほか『蓋廬』が注目されていない要因の一つには、他の文献とその公表過程に大きな違いがあった点が挙げられる。

本稿「張家山漢墓竹簡（二四七号墓）解説」の「序言」でも述べているように、『脈書』『引書』『奏讞書』『算数書』に関しては、その釈文が次々と『文物』誌上に公表され、『張家山』の刊行に先立って早々と研究が開始されていった。これに対して『蓋廬』は、『張家山』の刊行によって漸くその全貌が明らかとなり、この時点から研究が開始される。このように、釈文の公表が他の文献より遅れたことは、『蓋廬』に対する研究が少ない要因の一つと考えられる。これに加えて、筆者がもう一つの要因として推測するのは、張家山漢簡のイメージである。

張家山漢簡の発見後、最も注目を集めたのは、法制史料の『二年律令』『奏讞書』であり、また、医学書の『脈書』『引書』であった。これによって、張家山漢簡と言え

ば東洋史関連の資料、或いは医学関連の資料であるとのイメージが早くに定着し、思想関係の資料である『蓋廬』は、それらの陰に隠れてしまったように思う。

そこで本稿では、『蓋廬』を紹介する意味も兼ね、先ずこれまでの研究を整理する。そして『蓋廬』研究の現状を概観した上で、今後の課題について述べてみることにしたい。なお、本稿で取り上げる論考は、末尾の「付録 張家山漢簡『蓋廬』関係文献・論考一覧」に収録しているので、併せて参照されたい。

二、『蓋廬』に関する諸研究

『蓋廬』に関するこれまでの研究について、以下、項目別に概観してみよう。

（一）文字の隸定・語釈を中心とした研究

新出土資料を研究する際、まず写真図版を用いて再度文字を判読する作業が必須となる。

部分的に文字の隸定や語釈を行ったものには、劉釗「張家山漢墓竹簡《釈文注釈商榷（一）」、李銳「張家山漢簡《蓋廬》散札」、孟蓬生「張家山漢簡字義札記」、何有祖「張

家山漢簡積文与注釈商補」があり、許学仁「張家山M2 47 漢簡《蓋廬》篇釈文訂補」は、『張家山』釈文の語釈に加えて、多くの関連資料を載せており参考になる。

全体に渡って語釈と口語訳を付したものには、陳宇『伍子胥兵法破解』、邵鴻『張家山漢簡《蓋廬》研究』があり、とりわけ後者は広く諸家の説を集めて検討を行っている。

この他、言語学的角度から本書の語彙を考察した孫尊章「試論張家山漢簡《蓋廬》在歷史詞彙学上的価値」や、本書中の虚詞について分析を加えた李静「《張家山漢簡・蓋廬》虚詞研究」等の研究もある。

なお、竹簡資料を扱う研究では、竹簡の配列も大きな問題となるが、現在のところ整理小組の配列に対する異説は提出されていない。

(2) 『蓋廬』の思想内容に関する研究

次に、本書の思想内容について考察した論考を見てみよう。『蓋廬』は、全九章で構成されている。各章の概要は、本稿「第一部 張家山漢簡解題」を参照。）

田旭東「張家山漢簡《蓋廬》中の兵陰陽家」は、『蓋廬』第四章中の「日有八勝」、及び五行相勝理論に基づく戦術など、何れも兵陰陽家の論説部分に焦点を当て、その解

読を試みたものである。

続く同氏の「新公布的竹簡兵書——《蓋廬》」は、『蓋廬』の思想全体を視野に入れ、①兵陰陽家以外の思想、②兵陰陽家の思想の二方面から考察を加える。①では、第一章・第八章・第九章に見える統治や建国の方策は、『六韜』『管子』『司馬法』等の兵書にも常見するとし、また、『孫子兵法』と近似の論が見える第三章・第六章・第七章は、孫武、或いは斉の兵学の影響を受けているものの、大部分は実戦経験の総括であると指摘する。続いて②では、第二章の「九地」「九野」は遁甲術中の用語である点、第四章・第五章は兵陰陽家の「兵忌」「占驗」「望氣」「捩日」等の内容を含む点などを論じている。

曹錦炎「論張家山漢簡《蓋廬》」も、『蓋廬』の思想を総合的に論じた論考である。氏は、『蓋廬』と『越絶書』『吳越春秋』に記される伍子胥の言説とを検討し、伍子胥の代表的な思想流派は兵陰陽家に属するとする。また、『蓋廬』中に反映されている伍子胥の思想的淵源は、軍事・政治・哲学を問わず道家にあり、その思想は黄老学派に属すとも述べる。即ち氏は、伍子胥の思想は、大きくは黄老学派に属し、その兵学は兵陰陽家的特徴をもつと考えているのであろう。そして『蓋廬』は兵家の著作だが、陰陽数術の特徴も見え、且つ儒墨名法の色彩も兼

有し、『史記』太史公自序「六家之要指」に示される道家の説明と合致すると述べる。

陳宇『伍子胥兵法破解』は、『史記』『吳越春秋』『越絶書』等に見える伍子胥の事績やその時代背景をも考慮に入れ、伍子胥の用兵法を総合的に論じており、とりわけ本書と『孫子』との関連性を指摘する点に特色がある。連劭名「考古發現与先秦易学」は、先秦易学を考察する一環として本書第一章に見える「太極」に論及し、特に『老子』との関連を指摘する。

また同氏の「張家山漢簡《蓋廬》考述」は、①黄帝家の言、②陰陽五行、③実践理論、④古代刑法の四方面から考察を行う。①では、兵陰陽家の多くが黄帝に仮託するように『蓋廬』も黄帝に言及している点を指摘する。②では、本書に見える兵陰陽家の用兵法は、陰陽五行説の軍事上における応用であり、数術の一つに属すとする。③では、第六章「攻軍之道」と第七章「戦之道」を考察し、『孫子』『呉子』『六韜』等との関連性を指摘する。④では、古代において兵（軍事）と刑（刑罰）は一連のものであったとし、前者は第九章「救乱之道」、後者は第八章「救民之道」に相当すると述べる。各項目の分析はやや簡略だが、何れも多く関連資料を載せており、参考になる。

劉樂賢「談張家山漢簡《蓋廬》的“地幢”、“日幢”和“

日召」は、その題名が示す通り、第四章の難解な「地幢」「日幢」「日召」について考察したもので、特に睡虎地秦簡『日書』との関連部分を参考に解説を試みている。

張書豪「張家山漢簡《蓋廬》所見的兵陰陽——行軍布陣的數術原理」は、『蓋廬』中の「行軍布陣」の記述を手掛かりに、兵陰陽思想の背後にある數術原理を論じたもので、「行軍布陣」の數術原理は、自然の地勢に従うといった素朴なものから、次第に陰陽や五行の觀念が付加された複雑なものへと發展していった点を指摘する。

石井真美子「張家山漢簡『蓋廬』に見られる兵陰陽についての一考察」は、第四章に見える兵陰陽の思想を中心に考察した論考で、先行研究を踏まえつつその用兵法を仔細に検討し、それがほぼ『漢書』芸文志の兵陰陽の説明に合致する点を指摘する。そして兵陰陽の戰術は、現代人の目からは迷信じみて見えるものの、当時の人にとっては決して迷信ではなく、科学・天文・数学・曆法などを含む技術であったと述べる。

福田一也「張家山漢簡《蓋廬》中的黄帝与陰陽流兵法」は、『蓋廬』に見える黄帝と兵陰陽思想の關係を論じたものであり、本書には馬王堆帛書『十六經』と同じく、天の運行法則の発見者としての黄帝像が見えているとする。そして、『蓋廬』の作者は黄帝と兵陰陽家の兵法

とを結びつけ、黄帝由来の兵法のように装うことで、その權威化を図ったと述べる。

以上、『蓋廬』の思想内容に関する論説を概観してきた。その中で最も多いのは、やはり『蓋廬』第四章・第五章に見える兵陰陽家の思想に焦点を当てた論考である。依然として不明な点は存在するものの、これらの分析によって個々の用兵法については、かなりの部分が明らかとなってきた。ただし、統治論的要素をもつ第一章・第八章・第九章、及び兵権謀家的用兵法が見える第三章・第六章・第七章については、関連文献の提示にとどまる概括的な考察が多く、なお検討の余地が残されている。

(3) 『蓋廬』と『漢書』芸文志所収の二種の「伍子胥」

『蓋廬』では、主として伍子胥の兵法が語られる。『漢書』芸文志には、伍子胥関係の書物として、兵技巧家「五(伍)子胥十篇。図一卷」と雑家「五(伍)子胥八篇」の二種の「伍子胥」書が記されており、『蓋廬』との関係が問題となっている。

「江陵張家山漢簡概述」では、『蓋廬』は(内容的に)兵陰陽家に類するので、雑家はもとより、兵技巧家に比

定するのも難しいとする。

曹錦炎「論張家山漢簡《蓋廬》」も、『蓋廬』を兵技巧家に入れるのは難しいとし、『史記』南越尉佗列伝の集解に臣瓚が言う「伍子胥」書や、『文選』注の「伍子胥水戦兵法内径」等が兵技巧家の言説であると推測する。そして『蓋廬』は兵家の著作ではあるものの、兵家や陰陽数術家の特徴から儒墨名法の特徴をも兼有しているので、雑家中の一篇であろうと結論づけている。

邵鴻「張家山漢墓古竹書《蓋廬》与《伍子胥兵法》」も、『文選』が引く『越絶書』伍子胥水戦兵法内径などの「伍子胥水戦法」は兵技巧家の言説で『蓋廬』とは異なるとし、『蓋廬』は雑家に属する可能性を指摘する。そして『蓋廬』は雑家中の一篇であり、書名と重複はできないので、對話者の名前をとって「蓋廬」と命名したと述べる。

石井真美子「張家山漢簡『蓋廬』に見られる兵陰陽についての一考察」も、雑家との関連を認めるが、『蓋廬』の言説は多岐に渡り、それが比較的順序よく並べられていることから、「仮に『蓋廬』が雑家の『伍子胥』の一部だとしても、これがそのまま『芸文志』に記載されている八篇のうち的一篇と同じ形であるかどうかは疑わしい」と述べ、『蓋廬』が『漢書』芸文志記載の『伍子胥』書と関係のある可能性は大きい、その一篇だと断定す

ることには慎重な姿勢をとるべきであろう」としている。即ち、現在のところ『蓋廬』と兵法巧家とは無関係であり、一方の雑家とは何らかの関連をもち、その中の一篇、或いはその一部とする立場が多数派を占めていると言える。

(4) 『蓋廬』の成書時期とその作者

『蓋廬』は春秋末の呉王闔閭（在位前五一四年～前四九六年）と伍子胥（？～前四八五年）の問答形式をとることから、本書成立の上限は春秋後期（前五〇〇年前頃）となる。また該墓の下葬時期は、同時に出土した「曆譜」の記載から前一八六年頃と考えられるので、ここを本書成立の下限とすることができ。すなわち、『蓋廬』の原著の成立については、春秋後期（前五〇〇年頃）から漢初（前一八六年頃）まで、実に幅広い可能性が考えられるのである。

本書の成立時期、及び著者については、現在のところ、①春秋後期、伍子胥の著作、②戦国前期、伍子胥の門人弟子の作、③戦国後期、または秦漢の際、後人の仮託による著作、以上の三説が並び立っている。

①春秋後期、伍子胥の著作とするのは、呉榮曾氏であ

る。これは本書が春秋末の闔閭と伍子胥の問答体で構成されていることによるものであろう（注一）。

②戦国前期、伍子胥の門人弟子の作とするのは、曹錦炎氏である。曹氏は、『蓋廬』に見える黄帝像は賢聖であり、戦国中後期の法家の著作に見えるような厳正に法を施行し、よく軍事を治めた専制君主の黄帝像とは異なるとする。また黄帝の法について、「黄帝書」（戦国前中期の成立）・『管子』（戦国中期の成立）・『鶡冠子』（戦国中期より更に後の成立）との比較から、『蓋廬』は明らかに「黄帝書」や『管子』より早いと述べる。さらに、『蓋廬』には戦国前期の成立である『孫子』と本文も見え、以上を根拠に、本書の成立を戦国前期と推定している。なお、本書の作者については、伍子胥の自著部分を含む可能性を排除できないとしても、大部分は伍子胥の門人弟子の手になると推測する。

③戦国後期、または秦漢の際、後人の仮託による著作とするのは、邵鴻氏である。邵鴻氏は、本書において秦や呂後の諱（「正」「亥」「雉」）が避けられていないことに着目し、先ずその成立時期を、秦代より前、または秦漢の際と推定する。そして秦代より前と仮定した場合、以下の三つの理由から、春秋後期、戦国前期はもとより、戦国中期にも遡らせることはできないとして、戦国後期

以後の可能性を提示する。

(理由一)『蓋廬』に見える「母要堤堤之期(旗)、母擊堂堂之陣、母攻蓬蓬(蓬蓬)之氣」の前二句は、『孫子』軍争篇からの引用で、一般的に『孫子兵法』は春秋末期の成書、その流行は戦国以後で、李零氏の研究では遅くは戦国中期に至る。従って、『蓋廬』の成書は春秋後期にまで早めることはできない。

(理由二)『蓋廬』中の「倍(背)水而軍、命曰絶紀」の語は、黄帝に仮託した『刑徳』からの引用である。(『尉繚子』天官篇に、「按(黄帝)刑徳天官之陳曰、「背水陳為絶紀、向阪陳者為廢軍」と見える)。黄老学説の興起は戦国以降であり、馬王堆出土の「黄帝書」は、唐蘭の考証では戦国前中期、李学勤は范蠡の思想と『国語』越語下篇を踏襲しているとし、これらは『蓋廬』が晩出の証明である。また、呉光は「黄帝書」の成書を戦国後期、或いは秦漢の際とし、さらに『漢書』芸文志中の黄帝とその臣下に関連する書籍を戦国中期以後の作とする。従って、『蓋廬』の成書時期は春秋後期や戦国早期まで遡らせることはもとより、戦国中期とすることもできない。(理由三)『蓋廬』には、「以德攻者、其母徳者、自置為君、自立為王者、攻之」とあるが、「自置為君」という現象は、前四〇三年に韓趙魏が晋を三分して以降に出現し

たのであり、また「自立為王」という状況は、前三世紀に普遍的に発生している。従って、『蓋廬』の成書は必ずそれ以後、つまり戦国後期以後である。

邵鴻氏は、右の三点を総合し、『蓋廬』の成立を戦国後期、または秦漢の際とし、本書は伍子胥の作でも、闔閭と伍子胥の対話の実録でもなく、後人の仮託による書であると結論づけている。

このように、『蓋廬』の成立時期については、現在のところ諸説紛々とした状況にある。本文中には成書年代を推定する決定的な記述がないこと、また、本書と他の関連文献との比較を行う際も、文献相互の先後関係をどうみるかは研究者の見方に左右されること、以上の点が本書の成書時期をめぐって見解が分かれる大きな要因となっている。

三、『蓋廬』研究の現状と今後の課題

各方面から『蓋廬』研究の争点と主な論説について見てきた。以上を今一度整理し、『蓋廬』研究における今後の課題について考えてみることにしたい。

本書の文字・語釈等に対する研究は比較的進んでおり、

これによつて兵陰陽家の兵法を記した難解な箇所についても、一通りの解釈は可能となつてきている。よつて、文字の検討や個々の部分の釈読といった基礎的作業は一段落したと言えよう。

次に、思想内容の検討については、本書に特徴的に見られる兵陰陽家の用兵法を記した部分（主に第四章・第五章）を中心に研究が進められており、その具体的な運用法についても、かなりの部分が明らかとなつてきている。ただし、統治論的要素をもつ第一章・第八章・第九章、及び兵権謀家的用兵法が見える第三章・第六章・第七章については概括的な検討が多く、議論が十分に尽くされているとはいふ難い。

統治論を展開する部分は、『蓋廬』における軍事の位置づけを窺う上で重要であり、『蓋廬』の軍事思想を全体として如何に捉えるかということに関わってくる。また、本書には迷信的とも言える兵陰陽家の用兵法が見える一方で、それとは対照的な合理性の高い兵権謀家的な兵法も見える。両者はただ混在しているのか、それとも何か有機的な関連性を持つのか。本書に兵権謀家的な用兵法が見えることは、単に『孫子』等との影響関係に止まらない問題を孕んでいるであらう。さらに、本書の成立時期、及びその著者に関しても定論をみておらず、今後も

更なる検討を要する。

このように、『蓋廬』研究は、漸く本格的な思想研究の検討を行う段階に入つたばかりであり、未解決の問題は山積しているというのが現状である。

『蓋廬』の発見は、兵陰陽家に対する新しい知見をもたらし、これにより古代軍事思想史の研究はより一層前進することが期待される。ただし、本書発見の意義は決してそれに止まらない。天文学・占星術・陰陽説・五行思想・黄老思想など、以上のテーマを研究する際にも『蓋廬』は重要な資料を提供している。今後、様々な分野で本書が取り上げられ、各方面で研究が進展することを切に願う次第である。

注

(1) ただし、二〇〇八年八月現在、当サイトは閲覧不能のため、詳細は不明。邵鴻『張家山漢簡《蓋廬》研究』（十二頁）が紹介する呉榮曾説を参考にした。

〔付記〕

本稿は、平成二十年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

付録 張家山漢簡『蓋廬』關係文獻・論考一覽

（報告書・積文）

張家山漢墓竹簡整理小組「江陵張家山漢簡概述」《『文物』一九八五年第一期》

彭浩「江陵張家山漢墓出土大批珍貴竹簡」《『江漢考古』一九八五年第二期》

張家山二四七号墓漢墓竹簡整理小組『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』（文物出版社、二〇〇一年十一月）

張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編著『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』（積文修訂本）『

（文物出版社、二〇〇六年五月）

（関連論文）

劉釗「張家山漢墓竹簡」積文注釈商榷（一）」

（簡帛研究 <http://www.jianbo.org>）二〇〇二年二月一日・『古籍整理研究學刊』二〇〇三年第三期）

邵鴻「張家山漢墓古竹書《蓋廬》与《伍子胥兵法》」《『南昌大學學報』〔人社版〕第三十三卷第二期、二〇〇二年四月）

李銳「張家山漢簡《蓋廬》散札」（簡帛研究 <http://www.jianbo.org>）二〇〇二年六月二十七日）

田旭東「張家山漢簡《蓋廬》中的兵陰陽家」（『歷史研究』二〇〇二年第六期）

曹錦炎「論張家山漢簡《蓋廬》」（『東南文化』二〇〇一年第九期）

岑丞丕「張家山漢簡《蓋廬》校釈補正」（http://nuhm.pccu.edu.tw/p2_91_16.htm）

連劭名「考古發現与先秦易学」（『周易研究』二〇〇三年第一期）

田旭東「新公布的竹簡兵書——《蓋廬》」（『中華文化論壇』二〇〇三年第一期）

吳榮曾「蓋廬初探」（儒藏網站 <http://www.ruzang.net>）二〇〇八年八月現在、閱覽不能）

吳九龍「《伍子胥兵法破解》序」（『軍事歷史研究』二〇〇三年第四期）

許学仁「張家山M247漢簡《蓋廬》篇积文訂補」

(謝維揚・朱淵清主編『新出土文獻与古代文明研究』、上海大学出版社、二〇〇四年)

孟蓬生「張家山漢簡字義札記」『古籍整理研究學刊』、二〇〇四年第五期)

孫尊章「試論張家山漢簡《蓋廬》在歷史詞彙學上的價值」『龍岩師專學報』第二十二卷第四期、二〇〇四年八月)

何有祖「張家山漢簡积文与注积商補」(簡帛研究 (<http://www.jianbo.org>) 二〇〇四年十二月二十六日)

連劭名「張家山漢簡《蓋廬》考述」『中國歷史文物』二〇〇五年第一期)

李家浩「讀張家山漢簡《蓋廬》札記一則」『北京大學中國古文獻研究中心集刊』、北京大學出版社、二〇〇五年)

李靜「張家山漢簡・蓋廬」虚詞研究」『和田師範專科學校學報』二〇〇五年第四期)

劉樂賢「談張家山漢簡《蓋廬》的“地撞”、“日撞”和“日召”」

(武漢大學簡帛研究中心主編『簡帛』第一輯、上海古籍出版社、二〇〇六年)

張書豪「張家山漢簡《蓋廬》所見的兵陰陽一行軍布陣的數術原理」(簡帛網 (<http://bsm.org.cn>) 二〇〇七年五月一日)

石井真美子「張家山漢簡『蓋廬』に見られる兵陰陽についての一考察」

(『學林』第四十六・四十七号、二〇〇八年三月)

福田一也「張家山漢簡《蓋廬》中的黄帝与陰陽流兵法」『文与哲』第十二期、二〇〇八年六月)

(関連著作)

陳宇『伍子胥兵法破解』(軍事科学出版社、二〇〇三年八月)

邵鴻『張家山漢簡《蓋廬》研究』(文物出版社、二〇〇七年十一月)